

とやまのうぎょう 砥山農業クラブ

ほっかいどうさっぽろし
(北海道札幌市)

農山漁村イキキ実践部門



■応募団体等の概要

活動年数 10年

年間の活動日数 100日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 25,000人

■PRコメント

食農教育と市民参加型の農業による地域づくりなど、市民への情報発信や新しい農業経営を考えることを目的として、都市の小学生とその家族を対象に、果樹や野菜の農作業など農業体験を通じた「農業、農村、農産物、食」などの学習の場として、「砥山農業小学校」を開校しているほか、地域の活性化を図る活動を行っている市民グループ「八剣山発見隊」との共催で、「八剣山さくらんぼ祭り」などを開催しているところです。

■応募の概要

八剣山の麓の砥山地域は、札幌市の中心部から車で40分ほどの果樹を中心とした農村地域である。平成12年に8戸の専業農家が「農産物の高付加価値化や札幌市民を地域に招き入れた新しい農業経営の確立」を目的に、砥山農業クラブを設立。砥山地域の知名度を高めるためポスターや看板の製作、地域農産物の試食会を実施。平成13年には札幌市内の菓子店と、地域で収穫されたイチゴを使ったお菓子づくり「いちごクラスター」の取組みを開始。平成14年に更にアイデアや実行力を高めるため多方面に協力を呼びかけた結果、様々な業種の方々が参加した八剣山発見隊が設立され、砥山農業クラブの活動への支援・協力・提案、インターネットによる地域情報の発信などに大きな役割を果たしている。平成15年には八剣山発見隊の提案で、小学生とその家族を対象とした農業体験学習の場「砥山農業小学



校」を開校した。平成22年10月の大雪では600本のリンゴの木の幹や枝が折れて実を付けたまま雪に埋もれたほか、2箇所のだう棚が雪で倒壊する大災害が発生したが、翌日からの3日間で30人を越える八剣山発見隊の隊員が駆けつけ、落下したリンゴの収穫や倒壊しただう棚の復旧作業を行った。この様子がテレビや新聞で報道されると、200人を越える市民が集まり復旧作業に携わった。10年にわたる市民との交流で、農家と市民の間に深い信頼関係が築かれた成果である。平成19年からは定山溪温泉観光協会と協力し、ホテルや旅館から出される生ゴミを堆肥化して地元農家はその堆肥を利用し農産物を生産して提供する地域内リサイクルを実現するとともに、より安全安心な農産物の生産地域をめざし、砥山農業クラブの全農家がエコファーマーを取得するなど、市民に信頼される農業の構築をめざしている。



たいけんきょういくりょこう しずおか体験教育旅行

しずおかけんしずおかし
(静岡県静岡市)



■応募団体等の概要

活動年数 15年
年間の活動日数 210日
年間の交流・来場者数など
おおよそ 50,000人

■PRコメント

平成7年に行政の枠を超えた民間レベルで協力体制を整え、体験を主体とした教育旅行向けに「体験プログラム」として整理しました。国が進める子ども農山漁村交流プロジェクトを契機に、J Aや漁協及びグリーン・ツーリズム協会などとの連携を深め、平成21年度には山間部をも巻き込んだ「しずおかの恵み体験協議会」の発足につながり、中山間の活性化に大きく貢献しています。また、訪日教育旅行として中国、台湾、韓国からの誘致も進み、アジアと日本の子どもたちがともに農業・漁業体験などを通じて環境問題を学ぶ機会の創出に一役買っています。

■応募の概要

静岡県中部エリアに国内・国外の教育旅行を誘致しようと、民間が主体となり産官学の協力体制のもと、小学生・中学生を中心に体験旅行や修学旅行の誘客活動を行っている。静岡ならではの産業、文化、歴史など各地域で素材を掘り起こし、体験学習プログラムを商品化し、勉強会を開催しながら地域ごとのコーディネーター（世話人）を育成するなど、住民を巻き込んだインストラクターの養成と研修会を行っている。年に1～2回、教員自ら静岡地区のよさを体感して貰うため、学校の教職員を対象としたモニターツアーを開催、その他にもパンフレットやDVD等も作成し、学校や旅行会社に提供している。受け入れ活動としては、予約窓口を行い、各地区への連絡や手配、精算業務を補助するワンストップサービスを実施。農山漁村地域に体験学習を導入するにあたっては、当初は受入体制が出



来ていないこと等を理由にほとんどの地区から断られたが、サクラエビ漁で有名な由比漁港組合長の決断で最初の学校の受け入れが始まり、今では漁師が家族ぐるみで児童を受け入れて漁師料理体験等を提供している。これが県内の先進的事例として報道されると、他地域でも受け入れを希望する声があり、アマゴの養殖、椎茸栽培、ワサビ田を利用した農家発案の食育体験メニュー等が誕生。各地のJ A、漁協及びグリーン・ツーリズム協会等が教育旅行を軸に連携し、静岡地区として更に組織力と受入体制が強化。従来の民間宿泊施設と併せて農家民宿を利用する学校や漁家に民泊を希望する学校が現れている。早くから訪日教育旅行にも取り組んでおり、V J C訪日事業の採択（2回）で実施したファムトリップの効果から中国、台湾からの教育旅行誘致に成功している。2009年度の教育旅行受入実績は、横浜市の小学校42校、八王子市の小学校30校である。



NPO法人 豊田・加茂 菜の花プロジェクト あいちけんとうたし (愛知県豊田市)



■応募団体等の概要

活動年数 5年
年間の活動日数 60日
年間の交流・来場者数など
おおよそ 15,500人

■PRコメント

当団体は、「菜の花」をキーワードに持続可能な資源循環型社会の大切さを伝えています。耕作放棄地を有効利用し、リサイクル肥料を用い菜の花を栽培、良質な地元産菜種油を生産、遊休農地の解消、農業の復興、地産地消の大切さをPRするだけでなく、豊田市と共働して遊休農地を利用した市民農園を開設し、農の楽しさ・厳しさを多くの方が体験できる体験農業教室や、小中学校で、体験を通し、環境について考え、学ぶ出前授業などを行っています。具体的な活動促進体制の基盤づくり、技術指導、意見交換と学びの場を提供することにより、

地球温暖化防止活動の担い手を育成し、先進事例の一層の進展と各地への普及、行政や企業との連携を深め活動を充実、地域活性を目的として活動しています。

■応募の概要

2005年「あいち万博」の開会式で、会場を菜の花で埋めた菜の花プロジェクトが話題になったことをきっかけに任意団体として発足し、2007年にNPO法人豊田・加茂 菜の花プロジェクトとして設立。菜の花をキーワードに遊休農地の解消、持続可能な資源循環型社会の構築を目標に活動を行っている。会員は消費者、農家など愛知県内に約60名、賛助会員は農機具メーカー、食品会社等の18社が参加している。2009年より豊田市共働事業として、遊休農地を活用した市民農園を開設。個人への貸し出しのほかに、年4回、農業体験塾を開催している。毎回60名近くが参加し、農の楽しさや難しさの体験を通じて、自然への感謝や地産地消の重要性など、食に対する意識の向上を図ると同時に、遊休農地の活用でフードマイレージを減らすことが出来るなど環境と農業と食の関係を学んでいる。耕作放棄地を借り受けて、リサイクル有機肥料で土地を肥やして国産の菜種を生産し、圧搾一番絞りで薬品を使わない純地元産菜種油



「豊田・加茂のなのはな油」を生産。また小中学校の出前講座では、1年間を通し、菜の花を題材に、栽培、廃食油の利用(手作りせっけん、BDFの体験)、菜の花料理、菜種の収穫・搾油等を実施して環境について教えている。現在、搾油用菜の花(約15ha)、観賞用菜の花(約20ha)など40~50haの耕作放棄地が解消、菜種の生産は、平成22年度は10t。農地を保全したいという地主から農地を借り受け菜種の生産を行っている。また、豊田スタジアム周辺約6haを、豊田スタジアムと協力して、豊田市民の憩いの場、観光地としての位置づけも確立しつつある。年に3回程度イベントに参加して菜の花を使った料理の試食等でPRを行い、毎回約5,000人がブースに立ち寄っている。なのはな油の販売もイベントや生協等の販売を通じて年々増加しており、売上げは活動資金として活用。今後もなのはな油の販売を増やすことで、活動も栽培も広げて環境保全や食の安全、農業を盛り上げて行きたいとしている。



いなべ市農業公園

みえけん いなべし
(三重県いなべ市)



■応募団体等の概要

活動年数 12年

年間の活動日数 ほぼ毎日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 100,000人

■PRコメント

社会実験の場・総合行政実践の場 いなべ市農業公園～がんばるおじいちゃん・おばあちゃんパワー～

■応募の概要

いなべ市（旧藤原町）は、三重県の最北端に位置し、名古屋、桑名、四日市から車で約1時間の位置にある中山間地域である。藤原町地区は、昭和46年～56年にかけて中里ダムの建設で水没した農用地の代替地として畑地造成された地区であった。しかし、生産物の価格低迷、若年労働者不足、猿害等で生産意欲が減退し、荒廃化の進展に加え、一部では廃棄物の不法投棄の恐れがある等、環境の面からも憂慮すべき事態が生じてきた。そこで旧藤原町では、この土地を工業団地として企業誘致にと検討してきたが、パブル崩壊や工業用水不足で企業進出が見込まれず断念し、平成8年にこの土地を農業公園にする新たな土地利用構想を策定した。当時の旧藤原町は高齢化率27%と高く、また耕作放棄地の増加など地域の課題を解決するため、従来の「公園」という機能を超え①高齢者の活躍の場の創出②農業振興③循環型社会の実現④都市との交流の4つを柱に地域の高齢者が主体となって「スローなまちづくり」を合言葉に農業公園整備に着手した。

①高齢者の活躍の場の創出……高齢者の知識・経験を活かし、自らが計画を立て設計、施行、管理の全工程を担い、38haの梅林公園には、梅の庭園、ブルーベリー園等を整備。18haのエコ福祉広場には牡丹園、四季折々の花広場やハーブ園、パークゴルフ場などの整備を行った。また農業の持つ福祉的機能に着目し、ボランティアの協力を得て、後期高齢者向けの園芸福祉青空デイサービスを実施。仲間達と



のコミュニケーションづくりや、植物等の世話などで生きがいの創出を図っている。

②農業振興……一時は、荒廃化し不法投棄の恐れもあった農地を、梅やばたん等を植栽し、「農」をベースとした、集客観光できる公園として活用。8月の「ブルーベリー狩り体験」や梅の実る6月には「梅の実もぎとり体験」を行う他、公園内で収穫する梅でジュースやジャム等の梅加工品を開発・販売し、パッケージは滋賀県成安造形大学と連携して作成している。また、平成21年に開業した農業レストラン「フラール」では地元の直売所や農家から仕入れる野菜、園内で栽培する梅や地鶏等をビュッフェスタイルで提供している。

③循環型社会の実現……公共の道路や河川敷の草刈りや剪定枝を有償で受入れて堆肥化にし、梅やばたんの肥料として再利用、又家庭から出る廃食用油を回収して精製（BDF）し、園内の重機やゴミ回収車等の燃料として再利用するなど地域循環型の仕組みを創出。

④農村と都市との交流……好コースと定評のあるパークゴルフ場の他、梅林100種類4,500本、ばたん約35種類5,000本は東海エリア最大級の規模で、入園料を徴収するばたんまつりや梅まつりには合わせて約60,000人が訪れる。

平成21年度には、湯の山温泉女将の会の提案で、宿泊者にヘルシーな梅ジュースを提供したいと女将自ら梅を収穫して、温泉街で販売を行うほか、平成22年から園内にドッグランを整備し、新たな集客を図ると同時に、鳥獣害から集落を守る里守り犬を育てる取り組みも始めている。

とくてい ひ えい り かつ どう ほう じん 特定非営利活動法人 いえしま

ひょうご けん ひ め じ し
(兵庫県姫路市)



■応募団体等の概要

活動年数 5年
年間の活動日数 300日
年間の交流・来場者数など
おおよそ 100名

■PRコメント

基幹産業の停滞や合併で元気がなくなった自分たちの島をなんとかしたい。その思いで地元の主婦たちが島ならではの加工品を作り始めた活動が、都市部のみなさんとの強いつながりを生み出すまでに展開しました。この賞を通じて私たちの取り組みを広く知っていただくことで都市漁村交流の輪がさらに広まればと考えています。

■応募の概要

姫路市の沖合、高速船で25分の瀬戸内海に浮かぶ家島諸島は、東西26.7km、南北18.5kmのエリアに大小44の島で構成され、そのうち有人島は4島で、人口は合わせて約7000人である。家島地区は、これまで採石、海運業、漁業を基幹産業に発展してきたが、景気後退や公共事業の縮減、市町村合併の影響で、島の経済や元気は低迷。このような状況を解決しようと、地元主婦が立ち上がり、2006年にNPO法人いえしまを結成し、島の基幹産業である漁業と新たな観光を結びつけて、特産品づくりから観光・まちづくりへ繋げる活動を行っている。特産品供給システムを通じた交流で家島ファンを増やし、継続的に家島に訪れてもらう仕組みの構築を目指し、大阪の千里ニュータウンにおいて家島の海産物を販売。商品のパッケージやショップカードに生産者や生産方法に関する情報を掲載して家島の情報



を積極的に発信した。さらに特産品購入者等を島に招き、漁業見学、島民の案内による島内散策、特産品の生産・加工現場の見学、漁業体験、島民との交流会等を行うモニターツアーを実施。現在、このツアーを継続的に運営するため受入体制の準備を進めている。空き家を活用したゲストハウスの整備や、島内観光の窓口となってガイドやツアープログラムの提案、ゲストハウスの運営等を行ういえしまコンサルジュを、2009年に一般公募して現在11名が活動している。即売会や生産地見学ツアーを通じた双方向の交流により、家島と千里ニュータウンには強いつながりが生まれている。また島民も、主体的に活動に提案・参加するようになった。今後は、自然環境を守ることを意識したツアープログラムを開発して里海保全活動に展開することで、島民と都市住民が協力して海の環境再生に取り組む仕組みづくりを目指している。



いなかインターンシップ

こうちけんこうちし
(高知県高知市)



■応募団体等の概要

活動年数 5年
年間の活動日数 通年
年間の交流・来場者数など
おおよそ 100人

■PRコメント

2006年夏、「嶺北でチャレンジ!日本をチェンジ!」を合言葉に、「いなか若者がいる、いなか仕事ができる」を目標に活動をスタート。高知県北部の中山間地、嶺北地域を舞台に、大学生を中心とした若者が2週間~1、2か月程度地域に暮らし、地域の仕事をおこなういなかインターンシップ。(株)南の風社が企画・開発をおこなう、2006年夏から2009年までに15人が参加、2009年からはコーディネートをを行うNPOを立ち上げ、舞台を高知県全域に広げ、2010年夏には約100人が参加した。「交

流」だけではなく、「働く」「学ぶ」という要素を盛り込み、人口流出する中でも若者が活躍し、高知県全体を元気づけようとしている。

■応募の概要

過疎高齢化等の課題で悩む農山漁村地域と、ニートや引きこもり、離職率の高さや意欲低下等で象徴される若者たちの現状の解決策として、2006年から嶺北地域5町村で、若者と地域をつなぐ「いなかインターンシップ」を開始。若者がそれぞれ受入先での目標を立てて、2週間~2ヶ月程度農山村に滞在し、地元の住民に学びながら、農業や林業、観光などの仕事を担っている。この取り組みには、高知県内の大学生を中心に、京都府内や東京都内、また海外や専門学校など幅広い学生が参加。若者が地域に暮らすことも重要な活動の一部で、商店やお世話になる宿の大家さんなど様々なコミュニティの中での暮らしを体験している。受入がスムーズになるよう、過去に参加した学生達がツアーやイベント等を開催し、新たに参加する学生と地域の出会いの場を作っている。1週間未満の短期滞在は「プレ



インターン」と位置付け、長期に参加する母体づくりや、プログラムづくりを行っている。またインターンシップ終了後も活動を続ける場合は、オーバーインターンとしてその後の活動を支援。2006年から2010年夏までに延べ250名の学生が参加しており、高知大学、高知工科大学、武蔵野大学では、教育プログラムの一環として、いなかインターンシップを活用して単位化している。本やお菓子、お酒など、インターンシップの取り組みから商品が生まれたり、バイオマスや福祉、商品開発等の新しいプロジェクトが始まっている。2009年からは、高知県が移住対策の一環として「ふるさとインターンシップ」をスタートさせ、本活動の実施主体である人と地域の研究所が委託を受けた。2010年には嶺北地域以外の6地域で地域づくりをテーマにしたインターンシップを行い、高知県内11市町村で若者と地域の協働が始まっている。